

「会報」の編集活動について

―障害者運動における「会報」の編集活動と商業雑誌の編集の違い―

この間色々な形で会報とか機関紙の編集に携わり考えて来たことを、十分な議論ができなかったということの反省も含めて、文章化しておきたいと思います。

まだ、会自体として充分動きえていない時に、会を動かしていくひとつの梃として、会報の発刊ということに携わったことがあります。手話サークルの役員をやっていた時ですが、週一回の例会が充分に開けないという状況がありました。それを、以前から不定期で出されていた会報を、週刊化することによって、例会をきちっと開いていく態勢作りの一助となしえたとし、会報の発送とその発送の際に、添え書きをしていく中で、会員定着化に果たせた役割も指摘できます。また、編集作業において、文の校正作業で、執筆者の文に込められた思いということをとらえ返し、その校正のやりとりをきちっとすることによって、関係性作りということもいくらかなりともなしえたと思っています。[反省点もいくつかあります。週刊ということで、編集会議をもつ時間的余裕がなく、手話サークルということで、その中で、差別の問題をどれほどきちっと問題にしえるかということでの躊躇から、ほぼ一人で編集をしてしまっ、編集の作業自体が会作りに繋がるという運動を作りえなかったことです。]

商業雑誌や新聞などにおいては、編集者の横暴ということが、よく語られています。商品として売るということが、至上命令としてある雑誌や新聞の編集者はあらかじめ文を編集によって変えるということを執筆者に告げて、一任を取り付け(時には告げもしないで)、執筆者の意向など意に介せず、大幅な編集をするのは常です。

障害者運動における会報の発行というのは、一つの運動作りの中で位置付けられることで、その活動を通して内外の関係作りも果たすわけで、執筆者の意志をちゃんととらえ返して、校正の作業自体が内外の議論を活性化し、その中から新たな方向性を打ち出していく作業として、また、編集の活動自体が議論を深め関係性を深める会作りの役割を担うという意味ももっています。

実際には時間がないということで、校正のきちっとしたやりとりの作業をはしょって行くことが生み出されるのですが、これは障害者運動の基本的理念に照らして、大きな問題となります。

その障害者運動の基本的理念とは、「青い芝」の故横塚さんの言葉を借りれば、「はやく、ゆっくり」と示し得ます。運動ということで効率性が要求されますが、障害者運動はそもそも効率性第一のこの社会の価値観が、障害者を抑圧する論理だと真っ向から否定します。そのことが、この言葉の中に込められています。

障害者運動の会報活動においてもこの「はやく、ゆっくり」という言葉があてはまるわけですね。時間ということでせまられていても、基本的な関係性をきちっと押さえた編集活動が必要なわけですね。

障害者運動に限らず「会報」の編集で一番に問題になるのは、 差別語・差別的表現の

問題です。私自身が、関わった「会」の性格で、どこまで問題にしえるか、いつも迷ってきたことですが、自分自身の関わりの総括も含めて、きちっとした対応が必要だととらえ返しています。もうひとつが、会の方向性と沿うかどうかというところの問題です。これは、会報の発行自体が議論を深めて行くということと、会の方向性を広く訴えて行くというところで、ぶつかるようにとらえられる問題です。これは、その場その場で編集としてきちっと対応していく問題ですが、内部議論を公にし、外からの批判にもきちっと応えて行くということで、編集や会で活動していく者が、文で応えて行く作業も含めて、きちっとやっていければ、実は「ぶつかる」という問題ではありません。そして、もう一つは、執筆者と編集者との関係です。運動におけるインフォームド・コンセント（説明と同意）の問題です。編集者によっては、初めから「編集・校正を一任してください」と断って文を依頼したりするのですが、これまで書いてきたように運動（問題を解決していこうという活動）における編集は、関係づくりという意味ももっているわけですから、そのような関係作り自体を否定するような依頼は運動の方向性と矛盾するはずです。きめ細かなやりとり対応が必要になります。実際の現場では、時には事後処理になる場合も起きて来るかもしれませんが、それは編集者として立場性を問われている内容ではないかと思います。これは、の関係で特に問われてくることですが、この編集におけるインフォームド・コンセントの問題を、「分かりやすさ、読みやすさ」というところでは問題にならないと切り捨てる傾向があります。ですが、そもそも「分かりやすさ、読みやすさ」とは何でしょう？そのことが、障害者運動においてどのような意味をもっているのでしょうか？例えば、言語障害者が、発言している時に、分かりやすくないからといって、本人の意向を尋ねないで、通訳するということは障害者運動を多少なりとも理解している人はしません。「分かりやすいにこしたことがない」ということは、吃音者の問題で言えば、「どもらないで話すにこしたことがない」という論理につながります。私自身が、そのような自明とされる「「障害」の否定性」を否定するということを理論化してきました。障害者運動は、そのような「分かりやすさ」とは何か？ということを問うて来たはずで、言語障害者の言葉の通じる度合いは彼我の関係があると言われますし、意味がとらえにくいとされる知的障害者などの文章も、とらえる側によって逆にインパクトのある分かりやすい文になります。

「読みやすさ」ということでも色々なとらえ方の違いがあります。私の場合は縦書きにこだわります。色々なレイアウトは、むしろ読みにくさを感じます。文体ということにおいても、私の中には色々逡巡があります。以前は、「である」調でしたが、「知」ということの抑圧性を問題にしつつ、少しでもそのことを取り除きたいと、「ですます」調に変えましたが、今、他者との対立を避けようとする、「愛される障害者」としての卑屈性がそこにあるのではないかとの思いが湧いて来て、迷いが生じています。文体の不統一なり、いいよどみの中に逆により多くの意味をとらえられる場合もあります。手書きの文字がワープロで打った文字より、インパクトが大きく筆者の意が通じる場合もあります。「分かりやすさ、読みやすさ」など問題にならないと言っているのではありません。「分かりやすさ、読

みやすさ」ということ自体のもつ意味をとらえ、「分かりやすさ、読みやすさ」ということの中に自分の価値観があり、その価値観自体をとらえ返す作業抜きに、他者にその価値観を押し付けてはならないと言いたいのです。このことをインフォームド・コンセントという言葉で表しましたが、余りぴったりしません。説明する側－同意する側という関係がそこにはあるからです。確かに編集者の主体性の問題があり、そのことを抜きにしてこの議論は成立しません。他者の主体性を互いに尊重しつつその主体性を互いに引き出し合うそのような関係として押さえたいと考えています。

編集ということは、大変な作業ですが、逆に言うと、そのことの中で得ることの実に多き作業です。私の少ない体験の中でもそのことははっきりと言い得ます。